

九州大学医学部熱帯医学研究会

第 4 4 期 活動企画書

2009

Academic Society of Tropical Medicine

Kyushu University

目次

会長あいさつ

信友 浩一 九州大学医療システム学教室 教授

総務挨拶

宮原 敏 九州大学医学部医学科 4年

【国内研修班】

大分別府班

沖縄班

【海外研修班】

ブラジル班

タンザニア班

モンゴル班

『九州大学熱帯医学研究会 45周年記念誌』製作について

会長挨拶

研究会が発足し今年で半世紀が経ちました。学生諸君は会発足時の学生会員の熱い思いも振り返り、また今の時代の好機を見つけて今年の活動企画を作ったところです。学生の関心を引き続けている『沖縄』と『マザーテレサ精神』、新たな地に医学・医療の使命を探りあるいは担っている方々に触れていきたいとの発足以来の熱い思いは繋がってきています。さらに会長個人が願っていただけのことですが、『熱帯』に拘ることなく『北方』にも夢を描いて欲しいとの願いが今年は叶いました、モンゴルです。

どうぞ研究会の先輩方、また関係者の方々、学生の熱い想いに免じて数々の助言と篤いご支援を本年もここにお願いする次第です。

九州大学医学部熱帯医学研究会 会長
九州大学医療システム学 教授
信友 浩一

総務挨拶

昨年6年生が卒業され、第44期の熱研は4年生（旧M2）以下の学生で構成されております。このため今期の活動の中心を担うメンバーは昨年度とほとんど変わっておりません。

昨年、一昨年に低学年ながら、純粋な興味から班を立ち上げ、無鉄砲にフィールドに飛び出した者たちは、活動を通じて多くのことを学びました。現地で目の当たりにした現実にはただただ驚き、自らの未熟さを思い知り、得た知識を理解しようと帰国後必死になって調べ、考察しました。この作業は、更なる興味、問題意識を引き起こすきっかけとなりました。

そういった意味で、今期立ち上げた、ブラジル班、モンゴル班、タンザニア班、沖縄班、大分県府班の5班は、どれもより成長した目線で企画されました。またこの1年の活動を通じて、多くの部員が成長し、部が成熟して行くことを願っています。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

九州大学医学部熱帯医学研究会 総務
九州大学医学科4年 宮原敏

大分別府班

活動目的

実際に MOC の行う炊き出しに参加し、世間からはいわゆる弱者とされている人たちとふれ合うことで、そこに過ごす人たちの精神、また、マザーの精神について考える。

活動場所

大分別府 MOC

活動期間

8 月中旬

班員

折原 蓉子（保健学科 2 年）

班員募集中です。

抱負

去年の 9 月以来、世界的な不況が続いている。メディアでも路上生活者に対する生活援助としての炊き出し活動は幾度か取り上げられてきた。まだ学生という身分の私にとって、生きていくのが大変になるほどの影響は受けていない。しかし、世の中には、次の日の食料さえ不安に過ごす人々もいる。そのような人々に目を向けることで、その人たちの考えやマザーテレサの精神について私自身が考えるきっかけにしたいと思っている。また、医療制度はどのようになっているのかも調べていきたい。

沖縄班

活動目的

戦中から戦後そして現在まで、沖縄においてどのような医療が行われてきたか、またその背景などを、現地を訪れて生の歴史的資料を見ることで調査する。

活動場所

沖縄県那覇市他

活動期間

8月中旬～下旬

班員

河野雄紀（医学部4年）班長

抱負

45周年記念誌の企画を進めていく中で、当時の熱研が、さらに言えば九州大学がなぜ沖縄を巡回診療・学術調査のフィールドとして選んだのか、イメージしにくい面があった。それは当時の沖縄の医療環境の背景、つまり平均寿命や小児死亡率、どのような割合でどのような疾病が存在したのかなどを、よく知らないためだと思われる。また昨年度の沖縄班での活動では、沖縄における「介輔」について調査したが、その調査の中でも、特に終戦直後の医療環境について、情報・知識が不十分だったといえる。今回はその反省も踏まえながら、できるだけ生の資料を見ることで、現在に至るまでの沖縄の医療状況の変遷を明らかにさせることを目的として沖縄班を計画した。

ブラジル班

活動目的

日本においてはほとんど見ることのない南米における寄生虫症を中心とした熱帯病の実態とそれに対するブラジルの対策を学ぶ。

活動場所

ブラジル

活動期間

7月中旬から8月中旬

班員

末安巧人（九州大学医学部3年）班長

花村文康（九州大学医学部4年）

抱負

現在、多くの熱帯病は地球温暖化がすすんでも先進国である日本には及ばないといわれている。しかし、新型インフルエンザをはじめとした予測の難しい感染症が今後いつ我が国に到来するとも限らない。このような現状を踏まえ、「熱帯医学の実態を学ぶ」という一見時代に逆行しているかに思える活動が今だからこそ有意義であると考えた。将来、予測不能の新興感染症と向き合うことを見据え多くのことを学びたい。また、日本から見て地球のほぼ裏側に位置する南米・ブラジル。一見日本とは全く関係のない国のように思えるが、日系移民が世界で最も多い国として知られる。日系移民の足取りを辿るとともに彼らが自身にとって未知であった熱帯病とどのようにつきあってきたのかも学んでいきたい。

タンザニア班

活動目的

タンザニアの病院や診療所を訪れ、現地で行われている医療、国際協力などについて考える。

活動場所

タンザニア < Tabora, Ndala >

活動期間

2009年3月12日～22日（活動済み）

班員

江川 知康（医学科3年）班長

石島 洋輔（医学科3年）

未安 巧人（医学科3年）

抱負

タンザニアは赤道直下に位置するアフリカ中東部の国であり、アフリカの中では政治的、経済的に安定した国である。しかし途上国であることに変わりはなく、地方に行けば未だ十分に医療が行き届いてない場所がある。今回訪れた Tabora, Ndala という町はタンザニアの中でも内陸部にあり、経済的に発展した沿岸部とは異なり様々な点で立ち後れ、沿岸部では減少傾向にあるマラリアも資源に乏しい内陸部では未だ大きな問題である。活動報告にあたっては、このような地域における医療の現状、国際協力の実際、タンザニアの医療システムなどをキーワードとして報告していきたい。

モンゴル班

活動目的

モンゴルは、アレルギー性疾患の罹患率が世界で最も低い国の一つである。またモンゴル国内においても、急激に近代化の進むウランバートル市内と、遊牧地では、罹患率に差が生じはじめている。アレルギー性疾患の患者は先進国において急増しており、日本においても今や大半の人が苦しむ国民病となりつつある。しかしその原因は、まだ不明瞭な部分が多い。環境が清潔すぎるとアレルギー疾患が増えるという衛生仮説が提唱されているが、明確な根拠は存在しない。出生後さらされる環境が本当にその後の免疫バランスをきめうるのだろうか。またそうであれば、不衛生に戻ることはないにせよ先進国が取り入れるべきことはなんだろうか。モンゴルの生活環境を自らの目で見ながら、考察したい。活動内で、モンゴル健康科学大学の研究室への訪問や、学生との交流も予定している。

活動場所

モンゴル

活動期間

8月中旬から8月末

班員

宮原 敏（九州大学医学部4年）

抱負

今回アレルギーという不明な部分の多い疾患を、自分なりに捉えることに挑戦したい。実際にフィールドで見聞きしたものを如何に捉えるかは、私自身が衛生仮説を支持するか否かで大きく揺らぐ恐れがある。どちらかに偏ることなく、中立な目線で考察できるよう努めたい。

『九州大学熱帯医学研究会 45 周年記念誌』製作について

医学部医学科 4 年 河野雄紀

1965 年に九州大学熱帯医学研究会（以下熱研）が発足して、2010 年で 45 年がたちます。

熱研の最初の活動地は奄美大島でした。その年の報告書には「熱帯への一つの足がかりとなる地域」として奄美大島を選んだと記されています。翌年の 1966 年には、更なる「熱帯」を目指して沖縄八重山諸島に活動地を移して、以後熱研は 20 年近くにわたって沖縄へ学術調査団を送り活動を行ってきました。

沖縄での活動初期の 1970 年度第 5 期報告書にこのような言葉がありました。「われわれ熱研に学ぶものが、何よりも苦しんだ点は、つねに資金不足ということでありました。八重山だけでなく、さらに広く海外（アジア、アフリカ）に出たいという希望を抱きながらもそれを満足させるだけの資金をまだ手に入れることができない状態です。そのような苦しみは、近い将来、よいように解決される事を期待しつつも、八重山で得た数多くの貴重な経験を忘れてはならないと思うのです。」（「診療団を代表して」白日高歩先生）

熱研には初めから大きな目標として、「本当の熱帯」があったことにあらためて気づかされます。そして沖縄での活動を通して熱研の体制が安定してくると、熱研はその想いにそって活動地として海外の国を加えていきました。台湾・フィリピンなどに始まり、後にバングラデシュ・タイ・マレーシアなど、そして現在ではアフリカやヨーロッパ、中米など「熱帯」を超えたフィールドにまで広がっています。

いま熱研は現在進行形で変化しています。活動地の中心は国内から海外へとかわっていき、それと同時に当初は学術調査中心だった活動も、その地の医療状況を実際に体感して考えを深めるという活動形態に変化しています。しかしその変化の中でも発足当初からある「社会のため」という想いは、現在の現役部員にも確実に受け継がれていると思っております。

現在私たちは白日先生が切望されていたまさにその状態にあり、それは間違いなくこれまでの熱研が積み重ねてきた歴史の賜物です。そしてその熱研の変化の真っ只中にいるからこそ、私たちはあらためて熱研の歴史と経験の積み重ね

を見つめなおしたいと思い、今回『熱研 45 周年記念誌』の製作を発起いたしました。

構成としましては、先生方の寄稿を中心として、45 年間の活動及び活動形態の変化、また活動のつながりなどをまとめたいと考えております。ご協力いただくこともあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。